



じんけんを「他人ごと」から「自分ごと」へ

OYA OYA 通信

学びのホームグラウンド じんけん楽習塾

2020年度ルール

参加
尊重
守秘

マスクにまけない
楽しく
自分のペースで
ひとことしゃべる
時間をわけあう
しつこく追求しない

報告 7/1 「難病者の人生からくみとる人間の尊重」 梓川一さん(東大阪大学)

3回目は「難病者の人生からくみとる人間の尊重」がテーマでした。講師の梓川さんは大手企業のエリート社員でしたが、27歳で脳梗塞で倒れ、会社を辞めます。(実際は辞職勧告をされたようなものでした)梓川さんはその後大学で社会福祉を教えています。重度の障害を持って生まれてきた子どものお母さんたちとの出会い、ハンセン病回復者との出会いなど、どれもが印象深い話でした。そして、難病者の苦悩や受容の困難さなどの話がありました。実は梓川さん自身が稀少難病者で、会社で倒れたのもその影響だったそうです。ご自身の病院でのお話は壮絶なものでした。同じ難病を持つ患者たちの話や、薬がきつすぎてトイレの洗面台にもたれかかっている梓川さんに、毛布を掛け、ずっと背中をさすっていた新人看護「婦」の話など何度も涙が出そうになりました。人間はどんな状態でも生きることの意味があるのだと、絶対的価値観の中で生きることが大切なのだと感じました。(文責ばんみ)



って、共にいれないといけないと思いました。苦しい人に、よりそって、共にいれる教員になりたいです。

■「沈黙は金 雄弁は銀」というが、「沈黙は金」の意味がわかった気がする。目の前に苦しんでいる人がいたら、ともにいること。孤立させてはいけない。「なんもでけへんけど、ゴメンな」といつてくれる人がいてるか？生きることを拒否する感情は、東日本大震災で、阪神淡路大震災で、原爆で、目の前で肉親を亡くした人が思うことに似ているが、それぞれの人生の意味より生きていることが大事なのか！共存存在=尊厳

■「難病」という切口であったが、本当に「人生からくみとる人間の尊厳」というのを考え、感じる事ができた研修でした。梓川先生のお話もとても上手で、内容も含めてとても心に響いた研修でした。ぜひまたお話を聞いてみたいです。ありがとうございました。

■難病者も私も同じ人間 !!

♪健康が なにより大切 わが人生 ♪

■難病=老いと考えたと誰にでも訪れることだと思いました。生きる尊厳を誰にでも持てる世の中になるように望んでいます。今日は難病の学習だと思って参加しましたが、こんなに心にしみる深い学習で感謝しています。ほっこりした気持ちで帰路につきます。ありがとうございました。

■中学の教員です。思春期の子どもは多感で、いろいろな悩みを持っています。その中で「死にたい」という言葉もよく聞きます。生きることの大切さを伝えたいと常に思っています。今日の話では、梓川



みんなのふりかえり

■今まで、難病の方や痛みなどについて考えたことがありませんでした。ですが、教育を目指す立場として、とても大切だと思いました。医学の面で救えることはたくさんあるけれど、生きる苦しみや痛みで救うことはとても難しいとわかりました。どんな人にも人生があって、価値があり、認め合う存在でないといけないと思いました。苦しい人に、よりそ

先生の思い、「存在するだけでいい」が私の心に届きました。子どもたちにも届けたいと強く思います。

■お話が進むにつれ、自分とかかわるたくさんの方の力がうかびました。私はともに歩めているのか、そばでよりそえているのか、「指導」よりも何よりも教員としてそのことを忘れず、自分に問うていきたいです。様々なしんどさに苦しむ子ども、ほご者、なかまの教職員と、みとめあう関係をきずいていこうと思います。ありがとうございました。

■自分自身が障害当事者ですが、軽症な方なのできちんと向き合わずに、適当にごまかしているのが現実です。でも、いつまでも逃げ続けることはできず、山積した課題を抱えているときだったので、お話を衝撃を受けました。

■ひき込まれるようにお話を聴かせていただきました。あっという間で、もっとお聞きしたいと思いました。色々なことを思い出しながら、一気に自分の内で思いが落ちつけないので、メモしたレジュメを読み返しながらか、ゆっくり考えていきたいと思えます。すぐに行動は変えられないかもしれないけれど、少しづつ温めていきながらいきたいと思えます。

■カップラーメンを共に食べた仲間が、一人ずつなくなっていく、残った人の罪悪感はどうなにつらいものだったろうと涙がとまりませんでした。この苦しみが専門家でなく、何もできないと泣いてくれる友だちによって、少し軽くなったということが、とても大事なことだと思いました。深く刻まれたものをしっかり守っていきたくです。

■胸がいっぱいになりました。ご自身のことから人生を語られていたので、こんなに心に響いたのですね。「寄りそう」ということも教えられました。「求めあいともに生きる」こと、大切にしていきます。

■私も、小学生の時に1年半入院する病気になり、親は医者から「もしもの時のことも考えておいてく

ださい」と言われていたことを、後になって聞きました。そのような経験も、今、教師をしている中で、何か意味があることだったのかもしれないと思いつながら、仕事をしています。先生のお話を聞かせていただいて、まだまだ、自分が出会ったことのない方々と出会われたお話から、学ぶことが多くありました。(HAL)

■人権問題を考えるときや、日常生活の中でも、難病者、障害者は「なぜ差別を受けるのか」という方向から考えがちだが、「誰もが必要な存在」という視点は忘れてはいけない大切な視点だと感じました。

■お元氣そうな先生が、自らが難病であり、苦しい投薬の末とりハビリの中で、現在があるのかと思うと、ご家族の話、大学での話、カウンセリングでの話など、真実味が増して、本当に人の生きる意味を考えさせられました。相手も自分も尊重し、みとめあうということは、よく言われることだけど、そこが命をつなぎとめることにもなるのだと改めて思いました。障がい者施設の殺傷事件のようなことは、二度とおこらせない社会をつくっていかねばと思えます。

■今日はいろいろ考える話でした。入院されていた時の毛布をかけて3時間ずっと背中をさすってくれた看護婦さんの話や、子育ての話、大学生になった今も、成長記録をつけられていることなど、おどろくことの連続でした。ハンセン病の人とレストランに入った話など、難病という字がはいった封筒で、小さな地域で偏見が広がること、考えさせられることがいっぱいでした。孤独、孤立が生きる力を失わせるということなど、難病という視点で、世の中を見なおすきっかけをつくっていただいて、とても良かったです。(竹内たつお)

■zoom ありがとうございます。聞き逃した部分もありましたが、ご自身の話から前半を振り返ると存在することに意味があるということが重みを増して響きました。

連絡

もし参加者の皆さんで宣伝したいチラシ等ありましたら、ご持参ください。毎回ふりかえり用紙をくばります。後でメールファックスでもいいので送ってください。お願いします。通信に反映させたいと思えます。(公開だめなものはオープンにしません)

写真を撮影しますが、OYA OYA通信、八尾市人権協会のホームページなどで使用場合があります。なるべく個人が特定しにくいものをと考えていますが、困るという方は事務局に申しつけてください。

